



TITLE:

<大會抄録>梁の徐勉の「誠子書」

AUTHOR(S):

吉川, 忠夫

CITATION:

吉川, 忠夫. <大會抄録>梁の徐勉の「誠子書」. 東洋史研究 1993, 52(3): 522-523

ISSUE DATE:

1993-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154446>

RIGHT:

にある。ドイツが一八七〇年に金本位制を確立、それを機に金本位制度と中央銀行制度が世界市場システムの中核となる。この第三ラウンドへの移行に伴い、中國では民間ギルドが秤量貨幣としての銀貨を獨占するシステムの變革が迫られる。辛亥革命による山西幫の没落は、その結果である。しかし、孫文の指向する金本位制度は、いくつかの阻害要因のため挫折する。そして、三〇年代の世界恐慌が中國農村を全面的に襲い、銀貨經濟を國內で支えた銅錢經濟が終焉を迎える。

兩宋交替期における辛氏について

小岩井 弘 光

『宋史』列傳一七七卷中には數多の人物が立傳されるが、既に錢大昕・趙翼等によって指摘される如く、不備の點が認められ、立傳せられて然るべき人物が無視される場合も相當數ありうる様である。かかる觀點に立つて兩宋交替期に注目するに、軍事面で相當な關りをもちながら一人も立傳されなかつた辛氏一族が見出されるのである。諸書に散見される記事によるに、當時の辛氏には辛叔詹・叔獻、次世代の興宗・昌宗・企宗・道宗・永宗・彥宗等が武將として見出される。彼らは果して立傳に値しない人物であらうか、もし價值ありとすれば何故に立傳されなかつたのであらうか。

例えば辛興宗は方臘を生擒したとされ、その後に重賞の命をうけ雲中（大同）の粘罕（完顏宗翰）のもとに副使として往來する。辛

企宗は御營使司都統制として高宗の身邊にあつて明州遷幸に扈從する。これらは兩宋交替期に相當な活躍をしたものの一つとみて支障あるまい。しかし結局は『宋史』に立傳されなかつたのである。この際、辛興宗の場合でいえば重賞との關りが注目される。兩者のつながり方が辛興宗に幸ともなり、不運ともなり、立傳されるか否かにも影響を與えたかに思われるからである。

そこで改めて辛氏一族の個々人の足跡を尋ねることとし、辛氏が武將として如何なる經歷をもち、如何なる人間關係をもつかを明らかにしたい。具體的にその經歷が立傳に値するものか否か、注目すべき人間關係が見出され、それらが立傳せしめぬ問題を含んでいたかといった點まで言及出来れば幸と思う。

梁の徐勉の「誠子書」

吉川 忠 夫

梁の徐勉（『梁書』卷二五、『南史』卷六〇、四六六―五三五）が息子の松に與えた「誠子書」は、六世紀江南の一顯官の家政の一端をうかがうに足る興味深い内容の文章である。それによると、徐勉は都の清明門の屋敷内に、慧日と十住の愛稱をもつて呼ばれる息子たちの結婚にそなえてあらたに「兒孫の二宅」を營むにあたり、ひとまず十住の「南還の資」を用いることとした。「南還の資」とは、南方恐らくは嶺南の地方官づとめをおえても帰つた資産であらうと思われる。しかしそれだけではまかないきれぬため、二十年

にわたって丹精こめて作りあげてきた東田の「小園」を百金で賣却のうえ、その半ばを建築資金にあてるとともに、残りを姦に與えて姑孰に買得した土地に「小田舎」を營ませることとする。産業を経営することがなかったという徐氏の舊業に乖くことになりかねないこの事態に對して、内心忸怩たるものがなかったはずはあるまい。

徐勉は釋氏の「以財物謂之外命」、儒典（『周易』繫辭下傳）の「何以聚人曰財」なる言葉をもっていささかの辯明とするとともに、家長たる地位を姦に譲り、自分は今後いっさい「田事」に口出ししないことを宣言する。